



お知らせ

八千代市民文化祭

ふるさとの歴史展

テーマ

「旧村のいま・大和田新田のすがたⅡ」
忘れられたモノ、遠ざかるすがた、
かつてのムラの様子を紹介します。

と き：11月24日(土) 午後1時～5時
25日(日) 午前9時～午後4時

ところ：勝田台文化プラザ 2階展示室
設営準備は、24日会場にて午前9時から開始
・郷土史研通信 60号 発行

9月9日(日) 拡大役員会と例会

- ・八千代市郷土博物館 AM10時～PM4時半
- ・史談八千代原稿締め切り
- ・調査内容
- ・文化祭展示作品内容検討
- ・機関誌編集打ち合わせ

10月7日(日) 全日 機関誌校正

- ・八千代市郷土博物館 AM10時～PM4時半
- ・史談八千代32号校正
- ・文化祭展示作品調整

10月27日(土) 午前 機関誌校正

- ・八千代市郷土博物館 AM10時～正午
- ・史談八千代32号最終校正
- ・文化祭展示作品調整

11月18日(日) 全日
展示作品共同制作

- ・八千代市郷土博物館 AM10時～PM4時半
- ・文化祭展示作品制作共同作業

報告

5月19日(土) 例会

午後1時半～4時半

- ・八千代市立郷土博物館にて
- ・参加者数21名(うち新会員2名)
大和田新田調査研究分担・資料学習
6月16日(土)～17日(日)
- ・一泊旅行見学会の説明
- ・萱田町 時平神社のオビシヤの報告
(平塚会員)
- ・「白井富美子家文書」解説：
九六銭計算の文書について
(村田会長・関和会員)
- ・勝田円福寺の宝篋印塔と漢字宝篋印陀羅尼
(板倉会員)
- ・宝篋印塔のルーツについて(蔵会員)
- ・新会員の紹介
- ・郷土史研通信 58号発行

6月16日(土)～17日(日)

一泊旅行見学会

= 甲府盆地の古代から近世の歴史探訪 =

快晴の天候に恵まれ、21名の参加で楽しく甲州の地理と歴史を学びました。

6/16 勝田台北口＝釈迦堂遺跡博物館＝三分一湧水＝山梨県立考古博物館＝信玄堤＝ホテル神の湯温泉(泊)

6/17 舞鶴城址＝武田神社＝甲斐の善光寺＝県立博物館＝勝沼・ぶどうの丘＝勝田台(解散)
詳しくは、田中会員のレポート

「甲府盆地の歴史探訪」1泊旅行に参加して
をお読みください。

7月15日(日) 例会 中止

- ・午後1時半
- ・八千代市立郷土博物館にて
- ・情報交換・研究分担・資料学習
- ・ほか打ち合せ
- ・白井家文書まとめ

台風4号の接近によりやむなく中止となった。
その振り替えとして8月19日例会は午前10時～午後4時
その旨メールと電話連絡で周知した。

報告・・・麦丸の石造物を観る ——絵図を片手に——

村田一男

6月24日(日)、ゆりのき台の北にある農業会館(グリーンハウス)前に集合し、午後1時から4時まで旧麦丸村の石造物を中心に歴史探訪を行った。この事業は八千代市立郷土博物館の「平成19年度第1回再発見八千代」。案内を担当した私から、**大和田新田総合研究に関する新たな発見もあったので特に報告する次第である。**

麦丸村は市の中央部に位置し、北は桑納川、東は新川に面している。集落は寺(本郷)の南北に展開し、川沿いには水田が広がり、標高約20メートルの大地上はおおむね畑になっている。西部には新田地区の集落がある。

平成17年現在農家は121世帯中43世帯。江戸期から明治22年までは麦丸村。明治22年から睦村の大字、昭和29年町村合併により八千代町、同42年市制施行により八千代市の大字となる。世帯数・人口の推移は明治2年(1869)49戸315人、明治24年63戸428人、昭和36年79世帯481人、平成19年4月122世帯365人である。

歴史探訪の目的地は村の中心地周辺に限定し、特色を持つ石造物がある5箇所とした。江戸期の村の様子がわかる天保14年の絵図と比較しながら歩いて観察し、村の歴史を見ようというねらいであった。

絵図には、「天保十四年癸卯年七月日 下総国千葉郡麦丸村 匱繪圖面(そえずめん) 右之通り 御代官 勝田次郎様 江 奉差上候」とある。題名の匱(そ)のとおりに粗略だが、道・川・畑・田が4色で色彩され、各家の形と屋号一文字が記入されている。現在の家と道がぴったりと合い、村のたたずまいをながめていると江戸時代にタイムスリップしたような気分になる。

この絵図面は天保14年(1843)、幕府が印旛沼掘割普請を五大名に命じた年に、麦丸村から村の様子を絵図にして代官勝田次郎へ差し出させたもの。

見学地は①道祖神 ②日枝神社 ③東福院 ④大日前の胎蔵界大日如来 ⑤古墳跡(祀られたふた石1枚)



④大日前の胎蔵界大日如来像
寛文十一年(一六七二)

当日の参加者約20名、梅雨時の曇天にもかかわらず比較的涼しい日和が幸いした歴史探訪であった。参加者のおひとりは、「知人から村の様子を聞いて参加した、古い石仏から村の歴史の深さを改めて感じ、古墳があった

ことなど感激の発見でした」との声をいただいた。博物館では今後、村ごとに目につく特徴ある石造物などを手がかりにして、旧村の歴史探訪事業を続ける予定である。今年度2回目は、来年2月17日(日)「八千代八福神めぐり」、郷土史研のみなさまは案内スタッフとして活躍することになっておりますのでよろしく願います。

新たな発見情報

歴史探訪終了後の帰路で予定外の石造物を目にした。

石像(写真参照)は左に金剛界大日如来像、右には新しい地蔵菩薩像が鎮座している。後日調べてみると



所在地は麦丸字金塚、『八千代市の歴史 資料編 近代現代Ⅲ・石造文化財』に収録されている。麦丸の山崎直二氏によると、石像の所有者は麦丸の重左衛門家(斉藤誠氏)、元は二つの塚と一緒に大和田新田工業団地のはずれにあったという。たまたま畑で耕作中の斉藤氏のご子息にお会いし、話が聞けた。塚のことはわからないが、彼が県立八千代高校在学中(昭和50年代はじめころ)に私からその塚がどうなっているかを聞かれたという。

それを聞いて大和田新田の工業団地のはずれに塚が2基あったことを思い出した。その後、電話で斉藤誠氏から塚の様子を聞くことができた。「塚のある土地は売却したので崩した。時期は覚えていない。塚のひとつは日伸鋼業(株)のところまで気がついたら石像はなかった。もうひとつは山浦鉄工所のところにあった。

その塚の下に建っていた石像が現存の金剛界大日如来像で、右に安置した地蔵像は無くなってしまった代わりに当時の形かどうかわからないが購入したもの。毎年お盆には塚にお参りをし、線香を上げた。塚のいわれは伝わっていない」とのことであった。

うかつにも私はこの塚の所在を認識していたが石像の所在については記憶がない、塚に関心があったにもかかわらずその後の変化に注目していなかった。そこで塚のあった位置の会社の社長さんに創業時の様子をうかがったが塚や石像のことは不明であった。が創業時から推定すると2基の塚を崩したのは昭和54年ころと思われる。今回、大和田新田のはずれ、麦丸寄りの地に2基の供養塚と思われる塚が存在したことが確認できたことは現在進行中の大和田新田総合研究にひとつ寄与することができた。

「甲府盆地の歴史探訪」
1泊旅行に参加して
田中 巖

6月16日(日) 1日目

高井戸～八王子付近の渋滞で、最初の見学場所「釈迦堂遺跡博物館」(PA内に併設の形)に約1時間遅れて到着。遺跡は笛吹市と甲州市にまたがっており、全国でも珍しい両市の組合により運営されている博物館とのこと。学芸員の猪俣さんから、中央高速道建設前に急ぎ発掘され、先土器時代、縄文時代から平安時代までの集落や墓跡が出土したこと、特に縄文遺跡としては青森の三内丸山遺跡に匹敵する資料の豊富な大遺跡で、土偶の発掘数では群を抜いていること、土器では甲府盆地などで特徴的な水煙式土器(火焰式は新潟や北関東)などを出土しており、合せて5,599点もの出土物が重要文化財指定を受けていることなど、約1時間にわたって懇切な説明を受けました。祈りや祭祀で使われたと思われる1.100個を超える土偶からは、当時の髪型や衣服を復元するヒントも得られ、狩猟採集を生業としながらも定住して大型の水煙式土器などを作っていた甲府盆地の縄文文化を想像でき、多くの方々に見学を勧めたい博物館でした。

遅れたため、山本勘助の墓には寄れず、つぎの「三分一湧水」史跡で昼食と見学、古荒間古戦場、棒道など武田信玄関連の史跡を車窓から見学。映画セットそのまま、修学旅行客などで混みあっている「風林火山館」は下車して見学し、次に県立考古博物館に向かいました。

ここは県内各地出土の考古資料を一堂に紹介しており、4世紀後半(350～400年)築造の甲斐銚子塚古墳・丸山塚古墳をメインにした甲斐風土記の丘公園の中心施設。ここでは学芸員の保坂さんの案内で、展示品の解説と園内にある両古墳の頂上まで登り、甲府盆地を一望、甲斐国王の気分を味わいながら、しばし古代に思いを馳せました。

この後、「信玄堤」を見学してホテル「神の湯温泉」に午後6時ころ到着。急ぎ7種類の浴槽に浸かって、7時から静かな宴会(夕食)を済ませた後、幹事部屋に全員集まって、翌日の見学場所に関する勉強会(?)と2次会で盛り上がりました。

6月17日(日) 2日目

7時から朝食、8時にホテル出発。最初に旧甲府城の山手御門が再建された舞鶴公園、武田神社・藤村記念館、円光院の三条夫人墓所、信玄の墓とそれに隣接する河尻塚、信虎の墓がある大泉寺、そして甲斐善光寺などを見学・参拝した後、最後の見学場所の県立博物館に向かうという午後2時過ぎまでの若干強行軍ともいえる午前中の行事でした。

旧甲府城は信玄以後の江戸時代のもので、柳沢吉保が城主となった以降は幕府直轄でした。信玄など武田三代



の居城は躑躅が崎(つつじがさき)といわれたところで、今はその一郭が武田神社、護国神社、三条夫人墓所のある円光院

などとなっています。信玄死亡の3年後に、火葬された跡が信玄の墓とされています。信玄死亡9年後の天正10年に武田家が滅亡し、甲斐は織田信長の支配地となるが、信長も3か月後に本能寺の変で終わりを遂げました。

信長支配下の短い期間に、代官を務めた河尻氏はその強圧的支配のため、在地の武士や農民の怒りをかい、捉えられて逆さにして生き埋めにされ、それが「河尻塚」といわれ、信玄の墓と道を隔てた一角に碑が建てられています。指導者・支配者の居城や寺、活躍場所だけが観光地になっているところが多いが、民衆の息吹を感じさせてくれる史跡を案内して頂き、ホッとしたのは私だけだったでしょうか。

2日目朝から案内をいただいたのは、現地のボランティアガイド小田切武彦さんで、数ページにわたる詳細懇切な資料は、歴史好きのわれわれ会員にはたいへん勉強になりました。さらに、バスで移動中などに、信玄、勝頼夫人の辞世の句などを手書きのカードにして記念品として配って下さるといった、手の込んだご案内をいただき、永く記憶にのこる見学会となりました。



そして、最後の見学場所である県立博物館に到着したのは、正午過ぎ。2年前の秋に開館したばかりの真新しい博物館で、建物自体がいくつかの賞を受けたという、環境にマッチしたすばらしいところでした。出勤日ではないと思われた平川 南館長(国立歴史民俗博物館館長・八千代市立郷土博物館協議会委員)自らが、われわれを出迎えてくれ、展示物の説明も、担当いただいた出月さん任せにせず、一部は館長自らご説明いただきました。

甲府盆地は、ヤマトタケル伝説でも「酒折宮」が東山道、東海道の交差点として登場するように、また近世は江戸防衛の要衝とされたように、重要地点ながら自然環境は厳しいものでした。「曇るだけで三寸の水が溢れ、月夜だけで地面は灼ける」といわれ、周りを高山に囲まれているため、里が曇るだけで高山は雨となり、その雨で盆地は水害となり、月の光だけでも盆地は灼熱の地になると言われています。災害とくに水害との戦いの歴史を

刻む甲府盆地は、一方で名馬甲斐の黒駒を産する地として古代から注目され、中世には騎馬軍団としても恐れられる国でした。

こうした甲斐の国の歴史を学び、体験する施設として充実した県立博物館の存在が、羨ましいとも感じ、また行ってみたいとも思った短時間の見学でした。

遅い昼食を、勝沼のぶどう園でワインを味わいながら楽しみ、渋滞中も楽しい思い出にまどろみ、夢心地のうちに、午後8時、勝田台到着となりました。

以上、お世話になった皆さんに御礼を申し上げて、拙文ながら報告と致します。

萱田花島家墓地の 三体の石像仏について

板倉 守

八千代市公共施設循環バス「ぐるっと号」Cコース左回りの萱田下公会堂前で下車、時平神社の小振りな社殿に2礼2拍手1礼の作法通りに参拝を済ませ、左方に眼を転じると大小の庚申塔が立ち並ぶ花島家の墓地がある。

この一角は小規模ながら杉や百日紅などを交えた木立が繁り、木の間がくれに大きな三体の石造仏や墓石群の古色蒼然たる姿が垣間見える。今は季節柄か木々の緑に百日紅の紅が映えて、控えめな色香を醸しだしているようだ。

一角の正面にあたる東の道路側に回ってみると、公会堂側の境界を除く三方は高さ1m余りのコンクリート塀を引き回して区画されている。正面の塀には中央付近に3mほどの開口が設けてあって、そこには縁石を置いて砂利を敷いた参道が奥へ続いている。参道の正面と左側にはコンクリート二段造りの基壇を設けてあって正面の上段には親族と推察される供養塔が15基、規則正しく並んでいる。年代は古くは寛文から・貞享・元禄・享保・宝暦と判読できる。



地藏菩薩立像



大日如来坐像



阿彌陀如来像

また、下段の基壇中央には「胎藏界大日如来坐像」、向かって左側には「地藏菩薩立像」、向かって右側には「阿彌陀如来立像」が配置されており、像の前に立つと、霊域の安らぎと微かな緊張感に包まれている実感がある。

三体の石造仏は、花島猛氏の五代前の当主《七郎左衛

門》さんが江戸深川の石工に彫らせ、《大八車》に乗せて萱田へ持ち帰ったそうである。途中、船橋の海老川橋の袂では「こんな大きな石仏を乗せて渡れば橋が壊れてしまう」と物言いが付いて止められてしまった。それでも、もし橋が壊れた時は弁償するからと証文を書いて渡ってきたそうであるが、なんとも肝っ玉の太い小気味のいい話である。花島家では代々語り伝えられている話と、猛氏からお聞きした。

大日如来坐像の背面金石文には、寛文9年(1669)の陰刻があって、現在までに確認された大日如来像としては市内最古か、との推測もあり、なお、この石像は一度倒れて本体を損傷した経緯から、現在は蓮台の上に格座間を載せ、その上に本体を載せた姿で“法界定印”を結び、堂々と座っておいでになる。

参道左側に設えたコンクリート基壇には中型の親族供養塔6基と牛魂碑1基が並び、参道の右側には代々のご当主や親族の立派な供養塔が4基、入口のすぐ右側に外柵で囲った現在の花島家之墓がある。昨年11月に十八歳で夭折されたお嬢様もここで永眠されている。去る7月21日(土)に、村田会長をはじめ関和会員、佐久間会員、板倉が花島家を訪問し、「花島家墓地の石造仏三体を郷土の優れた文化財として広く紹介し、多くの人々に見て、聞いて、知って頂くよう図りたい」とお願いし、ご快諾を頂いた。私達はまず個人の墓地に立ち入る責任の重さを正しく認識し、遵守すべき礼儀の着実な実行に万全を期すことを、花島家の寛大な配慮に応える第一歩とすべきであろう。

【阿彌陀如来立像 背面金石文】

寛文八戊申天七月□日
道口禪定門 敬
阿彌陀石佛為 三十三年忌菩提也
妙口禪定尼 白
施主 花島七郎左衛門

【大日如来坐像 背面金石文】

寛文九年 萱田村
浄心 禪定門
大日如来石像為頓證菩提立之也
妙蓮 禪定尼
己酉 二月十日 施主 花島七郎兵衛
敬白

【地藏菩薩立像 背面金石文】

下総國白井領萱田村
施日晨朝入諸定 施主 花島七郎兵衛
入諸地獄令離苦
過去為妙盛禪定尼地藏石佛造立敬白
無佛世界晨衆生
今世後能施道 干寛文三天癸卯九月十六日

編集後記

大和田新田総合研究にあたり、「白井家文書」の解読、研究が暑いさなか会員の有志で進められている。

まだ解読の段階で解釈・研究までには至ってはないが、少しは見えてきた部分もある。

今後の研究の成果を期待したい。 編集子